

平成22年5月18日（火）

平成22年度

稚内市立稚内中学校

# 生徒支援ネットワーク



稚内市立稚内中学校は、平成19年度に創立60周年を迎えました。  
この記念すべき年を「飛躍の年」に位置づけ、その活動のひとつとして、『稚内中学校生徒支援ネットワーク』（略称：稚中生徒支援ネットワーク）を結成しました。  
平成21年度もみんなで力をあわせ、稚内中学校の生徒指導体制の支援・充実だけでなく、家庭・学校・地域の連携を益々強め、生徒一人ひとりが輝く学校・家庭・地域をめざして「北の連携力」を発揮しようではありませんか。

（このマークは手塚治虫さんが稚内市に寄贈してくれたものです）

# 稚内中学校生徒支援ネットワーク運営会議

## 21年度の活動を振り返って

### 1. 活動の概要と成果

結成3年目に入った21年度は、月一度の運営会議の開催と情報交換、学び合い、学校や親に対する支援が主な活動だった。静かな活動であったが、確実に成果を上げた。情報交換や事例に対する意見交換、学び合いが有効に作用した。特徴点は以下の点にまとめられる。

- 子ども課や中央小学校の参加などネットワークの輪が広がり体制が分厚くなった。
- 市の教育相談所・相談体制・全市的ネットワーク活動との連携により、活動が充実した。
- 稚内東小学校支援ネットの取り組みや潮見地区支援ネットの取り組みに学んだり、道新の取材を受けるなど学び合いが進んだ。
- 北地区における子育ての学び合いを豊にしていく支援ネット活動の広がり可能性が開かれた。(土井先生の指摘)
- 「つばさ」や相談所による支援・連携により、不登校支援・親支援に取り組み、成果を上げた。
- ケータイトラブルの問題や、困難な家庭の見守り、親支援に取り組んだ。

### 2. 「不登校支援」について

#### ①S君のこと

中学3年。1年生の1学期から突然学校に来なくなった。「つばさ」に通い始める。学校にも顔を出す。これだけでも劇的変化。「つばさ学級」「相談所」の支援を受け不登校が改善した。支援の輪の中で、親と対話し、つないでいったことが徐々に実っていった。関わりを持ち続けることが大切だ。その後、一進一退を繰り返す。進路選択するところまで行かず卒業したことは残念であった。

#### ②Kさんのこと

「つばさ学級」「相談所」とも連携し、粘り強く親支援。人間関係のトラブルから不登校に。時間をかけて、ゆがんだ心、傷んだ心が回復。修学旅行に参加し、文化祭を仲間とともに作りあげる。進路実現を果たす。関係者の支援があったからこそその立ち直り。

#### ③Mさんのこと

ケータイトラブルから、一時不登校に。昨年は別室登校が続く。サポートチームを作り、親とも定期的に懇談する中で、教室に入れるようになっていった。新年度からは、普通に学級で過ごすことができている。もう少し、親との懇談は続けていく。

#### ④Y君、H君のこと。

相談所や市の子ども課とも連携し、見守り活動、相談活動を進める。学校では指導部を中心に学年で相談活動・支援活動を進める。状況は大変であるが、子どもは頑張っている。引き続き見守りが必要。

※新年度、不登校はゼロ、休みがちだった子も元気に登校している。昨年までの支援に感謝し

たい。アンテナを高くし、未然防止、兆候が現れたら素早い対応に努めたい。

### 3. 例会で学んできた大切な点

- 相談しやすい環境が大事。学校や先生が一人で抱えてはだめ。子どもが抱える課題は、教育だけの問題ではない。社会の問題であったり、地域の問題であったりする。そこにネットワークの出番がある。
- 昔は、地域がめんどろをみていた。その地域がこわれている。はじめからめんどろをみない。支援チーム、本人や親も含め、支える相談体制、援助体制をとることが大事。不登校の子がいた。支援チームをたちあげ、取組を始める。朝起こす。おにぎりをもってきて食べさせる。寒くなれば、マフラーをプレゼントする。接する中で愛情が湧く。そういう中で踏み込んで話をしていけるようになる。人と人のつながりが大事。信頼関係の中で心を開いていく。それが解決につながる。
- こういう支援体制があることが、学校にとっては心強い。なにかあれば、相談できる。いつでも相談に入れることが安心となる。そして機敏に動きがつくられる。個別の困難なケースに具体的支援が可能となる。実効性のある取組を作り出すメンバーがいる。それが力になる。何よりも子どもにとって良いことだ。
- パチンコ店の放火、全盲の子の国際ピアノコンクールでの優勝、あまりにもちがう二つの出来事。親や大人の関わりの大切さを思う。いろんな人のお世話があってこそ、子どもが育つ。子どもは、一人では生きていけない。先生、地域の大人が、陰になり日向になり支援していくことが必要だ。
- 不登校で困っているケース。ちょこっとリストカットする。昼夜が逆転している生活。メール漬け。自分を受け入れて欲しい。わかってほしい。未成熟な精神が原因。母親は頼れない。じいちゃんばあちゃんほうざい。人の気を引く。親の気を引く。それで切る。「やめなさい、そんな弱いことでどうするんだ」そんな言葉がけでは解決しない。包んでくれる大人の愛情が必要。愛情不足、甘えられない寂しさをうめるためにカットする。とことん話を聴いて上げる大人の存在が必要。ある面で依存症でもある。専門のカウンセラーが必要になることも。丁寧に話を聞く、心のさびしさをうめていく。それが解決につながる。自殺にはいかない。
- 全市的な支援、組織体制は手厚い。稚内は恵まれている。運用はこれから充実させていく必要がある。瞬時に保護する施設があればとも考える。ケース会議にかける。児童問題連絡会を充実させていく。
- 子どもを守る機関、教える機関、取り締まる機関、縦糸はしっかりしている。そこに横のつながりがあったら初めて織物となる。文科省と厚労省は縦糸。横の連携はみんなでつなぎ合う。コーディネートしていく。これは国から言われてやっているのでもなく、お金をもらってやっているのでもない。個人の判断でやっている。知恵を出し合う、ネットワークをつくる、これが大事。市町村毎、地域ごとに横の手を結び合う自発的なネットワークづくりが大事。横のつなぎ合い、知恵の出し合い、網の目を作り合う努力、気の遠くなる尊い活動こそが子どもたちを支え、救うことになる。今後も、手弁当で網

の目をつくっていこう。気持ちをつなげていこう。

- チームサポートは、主任児童委員がつなげてくれる。名前を知って、見守ってほしい。日常的な支援は、学校が判断し、要請。ケースに応じチームを組んでサポート。下からサポートを創り上げる。情報連携ではない、行動連携を。
- 中央小学校の報告。いきしぶりがある。1年・2年・3年・5年の4名。5年生の子は「つばさ」に通っている子。玄関で入れない。親は仕事を休んで登校支援。原因がはっきりしない。友達なのか、勉強なのか、何か他にいやなことがあるのか。しかし、いろんな要素が絡み合っているようだ。それでいきたくない。1年・2年の子は解決。3年の子も出口に近づいた。どの子にも起こりうること。校内でチームを作り、親と連携してきたことが解決に。サインを読み取って未然に防ぐ。不安を爆発させないようにする。今までとは違う、育ちきっていない不登校が出てきている。子どもの貧困率、50パーセント、食べるものがない。大変な思いをして学校に来ている子がたくさんいる。学校では、パンやおにぎりをいつでも食べられるよう冷凍保存している。お母さんが働きに行く。夜一人で部屋で過ごす。寂しさになっていく。そのことに心が痛む。

#### 4. 稚中生徒支援ネットワークの可能性

30年の歴史をもつ稚内市の子育て運動ですが、近年地域的活動に重点が置かれ始めたと思います。中学校区単位にこの運動が推進されるようになりました。それにより、より地域により密着した取り組みがなされるようになったと思います。際だった活動として、「稚内中学校生徒支援ネットワーク」があります。家庭や関係機関との連携、学校としての組織的体制づくり、その中心となるコーディネーター的役割を果たす教師の配置などで、具体的な成果をあげています。子どもの地域支援ネットワーク的活動は他地域にもありますが学校が中心となった活動は多くはありません。また新体制となった稚内市教育相談所が全市的ネットワークの推進役として、この運動を全市に広げる活動を構想していることが心強いと思いました。

……北地区子育て懇談会での講師の土井先生の話から

「キレル子ども……目を向ける大人をもっと」……朝日新聞社説

「暴力行為が増え続ける。簡単にキレてしまう子ども。子どもが爆発前に発しているサインを読み取り、暴力を未然に防ぐ努力が、大人達に求められている。家庭環境のつらさを背負った子の多さ。家庭でのストレスを引きずって学校に来る子どもがいる。そうした子ども一人ひとりに向き合い、一緒に解決策を考える余裕は今の学校にはない。……教師や親以外の様々な人が支援体制を組み、学校の内外で子どもに目を向けるようにすることだ。……支援者が小さな異変に気づけば、スクールカウンセラーなどの専門家につなぐこともできる。……「文化祭よかったね」と大人が声をかけるだけでも、子どもは自分の価値が認められたと感じるだろう。児童館といった子らのたまり場にも目を配る大人がいてほしい。子どもの危機の深刻さは、いまや家庭が学校のレベルを超えているのではないか。地域や社会全体で、子どもを見守り、教育を支える覚悟が必要な時である。」

※ 稚内の子育て運動、稚中生支援ネットの活動は、まさに社説の提起そのものである。

#### 5. 稚中支援ネットワーク・潮見中支援ネットワークサポートメンバー特別例会

……北海道新聞社取材と記事

学校を舞台に地域作りを目指すのは、稚内中も同じだ。2007年、不登校などの問題を地域と一緒に解決する「稚中生支援ネットワーク」を設立。まず行ったのは、校下の町内会役員や同窓生ら約140人への「はがき作戦」だった。「入学式があります」「授業参観に来てください」学校行事のたびに、招待状を出した。「あなたを必要としています」という学校から地域に向けたメッセージ。それに住民も応えた。

住民10人ほどが月1回、学校に集まり生徒指導について話し合う。問題を抱える生徒の親の相談に乗るようにもなった。30年ぶりに応援団を復活させた。学校をきっかけに住民が結束した。ネット代表で僧侶の井上幹雄さん(65)は「先生は異動でいなくなるが、住民はそのまま。横のつながりが大事なんだ」と語る。同ネットワークは今春から、校下の小学校も巻き込んだ取り組みに発展させる。民生児童委員でメンバーの一人の田邊知栄美さん(48)は言う。「活動で地域が明るくなった。風が吹いた。この風を全市に広げたい」

……北海道新聞2010年1月4日記事より

#### 平成22年度も引き続き『支援力倍増』を

支援によって生徒は自立の道を歩むようになる。親も支援を求めている。生徒支援とともに親支援に取り組むことで、課題が解決していく。支援ネットの活動教訓です。

平成22年度は子どもの抱える問題点を早期に把握し、適切な支援体制を可能な限り提供できるように支援力を強めたいと考えています。

また、小中の連携が強められている中で、「稚中生徒支援ネット」を「北地区児童生徒支援ネット」という名称にし、より効果的な支援活動に発展させていきたいと考えます。

- ① 効果的で、相互激励の生まれる親支援の推進
- ② 人権尊重に裏打ちされた情報の開示とプライバシーの保持、有効な支援活動の創造
- ③ 学習意欲を高める学習支援活動の積極推進
- ④ 稚内北星大学との学力向上ボランティア提携の推進
- ⑤ 一人ひとりの児童・生徒に応じたサポート活動の展開
- ⑥ 各界各層で活躍している人を招いての懇談・研修活動
- ⑦ 「良さの発見・モニター」の登録者の倍増と活動展開
- ⑧ 稚内の医師をめざして『進路探検・医師講座』の開催

など、児童・生徒支援力を倍増しながら4年目も元気に活動に取り組みたいものです。